



きよめと熱意をもたらす「火」

聖書箇所; 使徒 2:2~3/マタイ 3:11/詩篇 51 篇 10 節/レビ記 6:9

⇒Ch. ① タイトル

はじめに

◆聖霊の象徴についてのメッセージ、最終回は「火」というシンボルで表される聖霊の働きについて考えてみたいと思います。考えるだけでなく、「火」に象徴される聖霊の働きが、神の恩寵として、今私たちのうちに働いておられること、また働き続けようとしておられることを認めながら、いよいよそれを私たちのうちにしてくださいと祈り求めるようになりたいと思います。

◆今朝の礼拝はペンテコステ記念礼拝です。ある教会では、ペンテコステ礼拝の日にはみな赤い服を来て礼拝するところがあるそうです。かなりインパクト強い日になるでしょうね。キリスト教の三大祭といわれる中で、クリスマスとかイースターは比較的知られている日ですが、ペンテコステとなるとほとんど「なに、それ」ペンテコステみたいな感じで、あまり重きが置かれていません。クリスマスはイエス様の誕生日、イースターはイエスさまのよみがえり、そしてペンテコステは教会の誕生をお祝いする日なのです。私は今から 38 年前、東京の練馬神の教会で洗礼を受けました。5/21 ペンテコステの礼拝の日でした。

⇒Ch. ② 神の教会のロゴ

◆私たちの神の教会(Church Of God— in Anderson, Indiana)のロゴには「炎」(fire)が使われています。きよめ派、あるいはペンテコステ派といわれる流れには、「鳩」の他に、「火」を象徴する「炎」のロゴが多く見られます。聖書には、「御霊を消してはなりません。」(I テサロニケ 5:19)とあります。



「消してはならない」ということは、御霊が「火」だからです。聖霊の炎は決して消してはならないのです。神の教会の改革運動の流れをくむ日本の神の教会は、いつの間にか火が消えてしまっている感があります。大いに反省しなければならいところです。ロゴというのは常にそこにいる人々の共通認識があるところに意味を持っているわけですから。

◆聖霊の働きは実に豊かで多様です。⇒Ch. ③ 聖霊の 8 つのシンボル

ここには 8 つのシンボルを挙げていますが実はもっとあるのです。これで礼拝では、柔和さを表わす「鳩」から、渇きを癒す「水」、喜びをもたらす「ぶどう酒」を取り上げましたが、今朝は、私たちがきよめて(純粹なものとする)純化させる「火」、および神に対する熱意をもたらす「火」について取り上げたいと思います。

◆五旬節(ペンテコステ)の出来事において、初代教会の弟子たちの上に「炎のような分かれた舌があらわれて、ひとりひとりの上にとどまった。」(使徒 2:3)とあります。彼らは聖霊のバプテスマを受け、また火の

バプテスマを受けたことが記されています。すでに、バプテスマのヨハネが宣教していた時に、「私のあとから来られる方は、・・あなたがたに**聖霊と火とのバプテスマ**をお授けになります。※注」(マタイ 3:11、ルカ 3:16)と語っていました。あなたがたに**聖霊と火とのバプテスマ**をお授けになりますとは、正確に訳すならば、「**聖霊によって、また火によってバプテスマする**」ということです。つまり、「**聖霊によってバプテスマ**」を授けられるということは、「**火によってバプテスマ**」を授けられることと同義だということになります。イエスが復活してから、40日間、いろいろなところに現われて、弟子たちに自分が生きておられること、そしてすでに教えてきた神の国の福音の教えをもう一度復習するかのように教えられました。そして、弟子たちに、「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を聞きなさい。ヨハネは水でバプテスマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。」と言って、天に帰って行かれました。「聖霊のバプテスマを受ける」—弟子たちをその約束を待ち望んで、祈りに専心していました。すると10日後に、復活してから50日目です。このときはユダヤでは、旧約時代における三つの祝祭の一つ、「シャブリオット」(50日を意味する)という祭り—これは大麦や小麦などの穀物の収穫を感謝するお祭りで、多くのユダヤ人がいろいろなところからエルサレムに集まってきていたのです。そしてその日に、イエスの弟子たちがみな一つ所に集まっていたその時、⇒Ch. ④ **使徒 2:2~4**

「**突然!**」です。天から、激しい風が吹いて来るような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡ったのです。響きが起こったのは確かですが、激しい風が吹いたわけではありません。「ような」響きとあります。そしてまた、炎のような別れた舌が現われて、ひとりひとりの上にとどまった。すると、**みな**が聖霊に満たされ、御霊がはなさせてくださるとおりに、他国のことばで話しました。」とあります。

◆バプテスマのヨハネが言っていたこと、つまり、「私のあとから来られる方は、・・あなたがたに**聖霊と火とのバプテスマ**をお授けになります。」ということがここで実現したのです。

◆「火」に象徴される聖霊の働きは、これまでの象徴とは異なり、「火」という象徴は神の聖性(Holiness)と深くかかわっており、神の本質に抵触するように思います。また「火」には、焼く(焼き尽くす)、燃やす、照らす、さばく、精錬する、きよめる、守りと導き、臨在といった多様なイメージが付加されています。それらすべてを取り上げてお話することはできません。今朝は「火」で象徴される聖霊の多様な働きの中から二つの働き、⇒Ch. ⑤ **二つのポイント**

一つは不純物を「精錬してきよめる」働き、それと、愛において、神に仕えることにおいて「燃やす」(熱意を与える)という働きに焦点を絞ってお話したいと思います。

1. 純化させるきよめの火としての働き

◆私たちの信仰生活においては、私たちのうちにある汚れや不義から私たちを浄化し純化させる聖霊の恩寵的な働きがあることを知らなければなりません。それはときには痛みと苦しみを伴うものですが、後になると神のきよさを身につける者となります。これは神の恩寵として神の子に与えられる聖霊による聖別の火、きよめの火と言えます。それは人間の情熱の中にさえ見られる不純物を取り除いて、純粹な情熱、神への純化された愛へと整えてくださる聖霊の火です。神に従う者にはこうした「聖霊によるバプテスマ」、また「火のバプテスマ」を受けることを受け入れなければなりません。罪からきよめられる心となることを求める必要があるのです。

◆ダビデは詩篇 51 篇の中で、「神よ。私にきよい心を造り(バーラー)、ゆるがない霊を私のうちに新しくしてください。・・あなたの聖霊を私から取り去らないでください。」(10 節)と嘆願しています。そうでなければ、神に背く者たちに、神の道を教えて、彼らが神のもとに帰ることはないからだとしています。ダビデという人は自分が「咎ある者として生まれ、罪ある者」であることを認めています、この認罪と悔い改めへの導きこそ聖霊の大切な働きです。

◆現代の女預言者である M・バジレア・シュリンクは『変えられたいあなたに』という本の中で、知らず知らずのうちに私たちの内側に侵入し、罪を通して暗やみの砦を築こうとするサタンの働きを発見し、告白して勝利するように呼びかけています。神の御旨は私たちが聖いものとなることです。そのために、聖霊は私たちに深くかかわってくださろうとしています。ですから、私たちは聖霊に導かれて歩まなければ勝利はありません。私たちの態度や思い、口、心のすべての領域において、きよめてくださる聖霊の助けが備えられているのです。

⇒Ch. ⑥ 罪のカatalog

(1) 態度の罪

無責任、怒り、虚栄心、自己中心、自己正当化、わがまま、権力欲・支配欲、迎合、詮索、傲慢、多忙、短気、立腹、いらだち、反抗、卑怯、空想、なまぬるさ、無気力・・・など。

(2) 思いの罪

隠し事、思い煩い、嫉妬、自己憐憫、神経過敏、尊敬の念の欠如、貪欲、肉欲、人の関心や認められたいという思い、さげすみ、苦々しい思い、落胆・・・など。

(3) 口の罪

おしゃべり、口論、中傷、人への悪口、批判、さばき・・・など。

◆以上のリストの中には、一見、罪と思えないものも取り上げています。たとえば「おしゃべり」、「詮索すること」、「空想にふけること」、「無気力」などです。シュリンク女史なぜそれが罪なのかをはっきりと説明していますが、本来、私たちが聖霊に導かれて歩むならば、聖霊が教えてくれるはずののだと言えます。

◆預言者イザヤは神殿において神を見る経験をしたとき、自分のくちびるが汚れていることを示されました(6 章)。それまでも彼は預言者として民に対して「わざわざいだ!」と繰り返し叫んでいました(5:8, 11, 18, 20,21,22)。しかし彼が神を見たときに、むしろ自分こそわざわざいであること、「くちびるの汚れた者」であることに気づかされたのです。くちびるの汚れは、心、人格、その人の全存在の汚れと関連があります。イザヤは神の聖にふれたときに自分の汚れに気づいたのです。神は自分の汚れに気づいたイザヤに対して、祭壇の上にあった燃えさかる炭をもって彼のくちびるに触れ、彼の不義は取り去られました。それから彼の生き方が変わったのです。別のことばを使うならば、「きよめられた」のです。そしてその「きよめ」のひとつの現われは、神のメッセージを聞いても悟ることのないかたくなな民に対して語り続けるという、まことに困難な働きに全生涯を費やしたことに見ることができます。イザヤは 6 章において聖霊のパプテスマ、また火によるパプテスマを受けたと言えます。

⇒Ch. ⑦ Ps 66:10,12

◆詩篇 66 篇の作者が「神よ。まことに、あなたは私たちを調べ、銀を精錬するように、私たちを練られました。12・・・私たちは、火の中を通り、水の中を通りました。しかし、あなたは豊かな所へ私たちを

連れ出されました。」(9節)と感謝しているように、精錬・純化させる火による「きよめ」の恵みは聖書全体において見るすることができますし、神に用いられた多くの器はみな火のパプテスマを受けています。

◆「練られている」と訳されたヘブル語は「ツァーラフ」 צָרַף (tsaraph)。旧約で 34 回、詩篇では 7 回です。神にも、人にも使われますが、「練る、精錬する、ためす、調べる、試みる」といった意味です。この動詞が最初に登場するのは士師記 7 章 4 節で、神がミデアン人との戦いにおいて神の民を選抜しようとして 3 万 2 千の民を試されました。まず「恐れている者たち」2 万 2 千人を帰らせました。さらに水を飲む飲み方によってためし、結局 3 百人を残しました。その 3 百人とは臨戦態勢を常に崩さずに水を飲んだ者たちでした。神は 1 パーセントの 3 百人の者たちを用いてミデアンの大軍を倒したのです。

◆主の弟子たちはみな特別な聖霊の精錬を受けた者たちでした。特に、神から特別にためされたペテロがいます。彼は特別に神に愛された者ですが、生来の弱さを十分にもっていました。そうした彼の弱さに気づかせるための精錬が必要でした。精錬の工程や内容は人によって異なりますが、その目的はみな同じです。

◆聖書には主の弟子たちを、神の人として磨くための火の精錬をめぐりぬけることを願っています。それによって信仰は試され、純化されるからです。ダニエル書の三人の若者—シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴ—も火の中をくぐらせられた話は有名です。彼らはバビロンにおいて有能な青年ユダヤ人たちでしたが、ネブカデネザル王の建てた金の像を拝まないということで、火の燃える炉の中に投げ込まれようといわれます。(ダニエル 3 章)。しかし彼らは「たとえ、神が自分たちを救い出さなくとも偶像の神々に仕えず、金の像を拝むこともしません。」と断言しました。ネブカデネザル王はこれに怒りを燃やし、炉を普通の七倍に熱くせよと命じ、火の燃える炉に彼らを投げ込むよう命じました。結果は如何に。面白いことに、三人の青年を炉に入れようとした者たちはその火炎に焼け死にましたが、三人の青年は焼け死ぬどころか、炉から出て来た時には、頭の毛も焦げることなく、上着も以前と変わりなく、火の臭いもしませんでした。彼らは以前にもまして栄える者となりました。

◆この話は事実だと信じてますが、同時にきわめてメタファー(比喩)的です。なぜならすべては火によってためされるからです。使徒ペテロは「信仰の試練は、火を通して精錬されてもなお朽ちていく金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。」(ペテロ第一、1:7)と、迫害にあって離散している神の民に対して語っています。聖霊は神のよしとされるところと時において私たちを精錬します。しかしそれが耐えられないものではないことも主は約束しておられます。

◆ペテロの場合には、サタンが彼を(他の弟子たちも)ふるいにかけることを神に願って聞き届けられました(ルカ 22:31)。もしこのとき、主がとりなしてくれていなかったらどうなっていたことか。サタンは弟子たちをふるいにかけて神から引き離そうとしたのですが、その意図は実現しませんでした。主が信仰がなくならないように祈ってくださっておられたからです。しかも、主イエスはペテロに「だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちをカづけてやりなさい。」(22:33)とまで言われたのです。なんと配慮の行き届いた主のことばでしょうか。そんなことも知らずに、ペテロは自分の本当の弱さを知らずにいたのです。それゆえにペテロが主を拒み裏切ったとしても、それを通して彼は彼のうちにある大言壮語という罪から解放され、きよめられたのです。それ以来、彼は「自分だけは大丈夫だ」と誇ることをしなくなりました。精錬されて清められたからです。聖霊による浄化、純化の恵みにペテロはあずかったからです。

◆私もペテロと同様の罪を犯しました。主を裏切ったのです。しかし主のあわれみにすがりついて祈ったとき、ルカ 22:32 の主のことばが心にしみる経験をいたしました。私もダビデのように祈ります。「神よ。私にきよい心を造り(バーラー)、ゆるがない霊を私のうちに新しくしてください。・・あなたの聖霊を私から取り去らないでください。」と。

2. 霊を燃やし続ける火としての働き

⇒Ch. ⑧ 二つのポイント

◆第二のことに行きましょう。使徒パウロはローマ書 12 章で、主に対する愛に基づく献身の在り方を語っていますが、その中の 11 節でパウロはこう言っています。

⇒Ch. ⑨ ローマ 12:11

【新改訳】「勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えよ。」

【新共同訳】「怠らず励み、霊に燃えて、主に仕えなさい。」

【フランシスコ会訳】「熱心でたゆまず、心を燃やし、主に仕え・・(なさい)」

【岩波訳】「熱心さにおいて遅れをとらぬ者(となり)、霊において熱くなり、主に隷従し、」

【柳生訳】「怠ることなく熱心に努め励み、燃える霊をもって主に仕え」

【エマオ訳】「熱心の点では、臆することなく、霊に関しては熱く燃え続け、主に仕え続けなさい。」

◆「霊に燃え」、「霊に関しては熱く燃え続け」という「燃える、熱く燃え続ける」と訳されたギリシャ語は「ゼオー」ζέωで、本来、煮えたぎる、沸騰する、熱烈である、燃えているという意味です。ここと使徒 18:25 の 2 箇所に使われています。パウロは「霊において熱く燃え続けながら主に仕える」ことを進めています。使徒 18:25 では雄弁なアポロが霊に燃えていたが、聖霊のバプテスマについては知りませんでした。そこでプリスキラとアクラは彼を招き入れて、神の道を一層正確に説明しました。すると彼は、より強い語調で、イエスがキリストであることを聖書によって論証し、ユダヤ人たちを徹底的に論破したのでした。単に、心が燃えていても、それが正確な知識に裏打ちされていなければなりません。感情と知性、体験と神学のバランスが重要です。感情だけではだめです。体験だけではだめです。知性も神学もなければ。逆に、知性や神学があっても感情や体験が冷めていてはだめです。神に対する、あるいは、真理に対する燃えるような思いを持つ必要があります。これらはすべて上から与えられなければなりません。

◆同じ「熱意」であっても、ねじ曲がった「熱意」というものもあります。ねじ曲がった熱意とは妬みのことです。嫉妬、ジェラシーです。ユダヤの指導者たちは、初代教会の弟子たちが大勢の人々をいやしているのを見て、「ねたみに燃えて立ち上がり、使徒たちを捕らえて留置場に入れました。そして彼らをむちで打ち、イエスの御名によって語ってはならないと言い渡したのです(使徒 5 章 17, 18, 40 節)」、神の熱意が起こってくるころでは、ねじ曲がった「熱意」というものも立ち上がってくるのです。なぜなら、その背後に神の敵である冷めていてはサタンが妬みを操作しているからです。

◆また、武力によってローマと戦おうとした人間的な熱意もあります。使徒の名前が記されている使徒 1:13 には、「熱心党员シモン」という人物がおります。ローマの手先と手働いて利ざやを稼いでいた取税人のマタイと対比的です。

◆第一のポイントとリンクしますが、神に対する「熱意」は聖霊の火によってきよめられる必要があります。パウロも前は間違った熱意をもってキリスト者たちを迫害しました。しかし彼が聖霊のバプテスマを受けて、聖霊に満たされたとき、彼の熱意はきよめられ、聖なる熱意と変えられました。そのようにして彼は生涯、主に仕えたのでした。

◆神に対する「聖なる熱意」は主の救いの道を教える立場にある者にとってはきわめて大切な賜物です。霊が燃やされるということは聖霊の働きの何ものでもありません。「熱意」は電流のように人から人へ、言葉よりもはるかに早く伝わります。周囲に働きかける「熱意」こそ、リーダーシップの秘訣と言えないでしょうか。

◆熱意はみせかけやまねごとでは長続きしません。神のために打ち込む聖なる熱意は神から与えられた一つの賜物です。自分の中に「熱意」が生まれるとき、その人に新しい人生が始まります。「熱意」が自分の中に渦巻くとき、新しい自分を発見します。「熱意」は私たちの前に横たわる障害物を乗り越えさせるダイナミックな力です。ですからその「熱意」は燃え続けていなければなりません。

◆かつて、旧約の幕屋においては、絶えず、火は燃え続けていました。祭司に対する神の命令として、**「全焼のいけにえは、一晚中朝まで、祭壇の上の炉床にあるようにし、祭壇の火はそこで燃え続けさせなければならない」**(レビ記 6:9)とあります。私たちも主の祭司として自分自身を全焼のいけにえとして祭壇の上に置いて、聖霊の火で絶えず燃え続けさせる者とならなければなりません。それは私たちの肉的な、人間的な頑張りでは続きません。しかし聖霊によって支配されるならば、聖霊に満たされ続けていくなれば、内なる神への聖なる熱意は燃え続けていくのです。天からの火がひとりひとりの上にくださるように祈りたいと思います。